荒尾市立府本小学校　校長便り　№１６

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和７年６月６日(金)

雑感

運動会後の6月梅雨間近、何となく気分は沈み込む。学校現場にいると気付くのだが、子ども達にもあまり活気が感じられなくなる時期でもある。雨が降るという理由で外では遊べないことも原因だろうが、もう一つの原因は目標の欠如ということもある。運動会前はモチベーションも高い状態でキープできた。子ども達の今の目標は差し詰め「夏休み」だろうか？

自分自身のことを振り返ってみた。梅雨…、6月…、私はやはり読書だったように思う。小学校時代の読書は漫画ばかりだった。晴れた日に備え、野球漫画の「ドカベン」などをよく読んだものだ。当然、野球しかやらなかったわけではないので、他の本も読んだ。やはり漫画だ。釣りに興味があったため、「釣りキチ三平」という漫画も読んだ。ギャグマンガもたくさん読んだ。漫画本も買いたい放題とはいかないので、友達と本の貸し借りもしていた。雨の日でも何だかんだ言って楽しかったものだ。何もすることが無いという状態が最もいけない状態なのだろう。

今の子ども達はどうするのだろう？ フェイス・トゥ・フェイスの交流を考えて欲しいものだが…。

Don’t find fault, find a remedy; anybody can complain.　Henry・Ford

「あら探しをするより改善策を見つけよ。不平不満など誰でも言える。」

「減点法より加点法」の話

担任時代、子ども達にこんなことも話してきました。「ある人間が目標を設定した時、他人がお前には無理と言いました。どんな気持ちになる？　いやだよね。そして、その人は無理だという理由をたくさん言いました。あなたはどうしますか？」子ども達は、「悔しい」「見返す!!」「努力する!!」「頑張る!!」と、前向きな意見をたくさん出してくれました。内心ホッとした私がいました。それは何故か？大人は何か新しいことをしようとする時、新たな第一歩が踏み出せず、自分の勇気の無さを棚に上げて、屁理屈をこねることが多いからです。多かれ少なかれ、子ども達はその影響を受けて育ってきています。だからこそ、私たち大人自身が、何事にもチャレンジ精神を忘れないようにしたいものです。そして何より、子どもの失敗を攻めすぎないことが大切です。

物事をなす時に、無理な理由を重ねるとマイナス要因が増えて、もともと可能性が１００％あっても、どんどん可能性が減っていきますよね。いわゆる減点方式です。どうかすると０％よりも可能性が下がってしまいます。こんなことでは子ども達にやる気なんて起きません。このマイナスの発想を転換して、加点法に変えてみましょう。もともとの可能性を０％として、原因を探り、考えられる障壁をクリアする策を考えていきます。この策で１ポイント、この策で２ポイント…、と加点していきます。するとどうでしょう。いつの間にか７０％、８０％…。ついには失敗するはずがないという段階まで可能性が伸びる訳です。要は考え方なんですよね。

上の言葉をご覧ください。アメリカの自動車会社、フォード・モーターの創始者、ヘンリー・フォードの言葉です。企業のトップの方々の多くは、同じようなことを仰っています。困難に立ち向かうためには、マイナス思考ではいけません。前進や進化するためにはその問題を避けるのではなく、その問題を解決していくことが必要です。子ども達には、目の前の壁を加点法で乗り越えて行ってほしいと思っています。

シリーズ「自分を語る」#１６

小学生の頃は、父の方針で寒くても出来るだけ厚着をして、ストーブやこたつは出さないようにしていました。今でもこたつはありません。こたつを出すとつい横になって寝てしまうからです。保護者の皆様も経験があるでしょう。すぐに風邪をひいてしまいますね。目が覚めた時は「あれっ、のどが痛い、しまった!!」となってしまいます。寝っ転がってばかりいると、体に悪いのは明白なのですが、ついつい気持ちよくなって寝てしまいます。でもあの頃、ストーブだけの４畳半で、何となく心も温かくなりました。もちろん狭いところに家族４人がいる訳ですから、体温で温かくなっていることもあるのでしょうが、団らんの時間が「温かさ」を生んだのかもしれないなって思います。その狭い４畳半の部屋でやっていることはテレビを見ながらお茶を飲んだり、みかんを食べたり、トランプをしたり…。娯楽の王様がテレビだった時代で、自然とテレビの前に人が集まってきていましたからねぇ。今はどうでしょう。子ども専用のテレビがあり、遊びはテレビゲーム…。何か切ない…。

駄菓子屋はよく行きました。府本小校区にはまだ残っているのでしょうか？　私が小学生の頃の様な駄菓子屋は見つけることも難しくなりましたね。当時の駄菓子屋は、お店には必ず、おばちゃん、がいて、いつも同じ時間帯、同じ格好、同じ表情、同じ喋りで待っていてくれる、そんな感じでした。量販店には駄菓子屋さんがありますが、明らかにアルバイトのお姉さんがレジを打っていますね。当時、買うものといったら、あたり付きのガムや飴、あとはクジなんかよく引いていました。⑩円とか⑳円とか、小銭をしっかりと握りしめ、駄菓子屋に走っていったものです。最近の子ども達の放課後って、どんな感じなのでしょう？　社会の劇的な変化、大人の価値観の変化が相まって、子ども達が放課後にお金を持って店に行くこと、それ自体がタブー視されるような感があります。更に、逆の現象も起こっています。高額のお小遣いを持ち歩き、ファミレスやコンビニで友だちに「奢る」というような現象です。家庭での価値観が大きく影響する現象です。子どもの頃、我が家では「奢る」＝「子どもはしてはいけないこと」でした。大人になって冷静に考えると、この行為は金の力で友達を作る行為としか思えません。しかも、これでは本当の友達はできません。困ったときに寄り添ってくれるのが本当の友達ではないでしょうか。本当の友達はお金で買えるものではありません。

昔のことを思い出せば思い出すほど、何か切なさを感じてしまいます。そう言えば、最近の駄菓子屋さんには、私と同世代の大人が多いような気がします。懐かしさを味わうために。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）